

岡崎ホスピスケアを考える会通信

6号

平成12年8月4日

6月の例会報告

「自分のカルテを作りましょう」

講師：有吉寛院長先生

「病院のカルテ」は、私の病気の情報を医師、看護婦、検査技師、薬剤師によって書き込まれたものです。「自分のカルテ」は生まれてから現在まで、両親をはじめ、育ててくれた人、周囲の人を思い出しながら、私自身の人生を私が書き込むものです。それによって臓器移植などの問題も含め、自分を見つめ最後の日までどう生きるかを考え決めていくためのものです。

「私のカルテ」は現在スタッフで準備作成中です。今年度中にお渡しできると思います。

7月の例会報告

「患者と医者の信頼関係を築くには」

講師：内田達男先生

事前にお渡しした質問に答えながら、ガンの告知治療の選択の限界、終末期医療、死について話していただいた後、二人の先生にも参加していただき四グループに分かれて話し合いをしました。

内容についてはグループの報告と、感想をお読みください。



手縫いの会報告

「これはおばあちゃんにいいかしら？」「こっちは恋する乙女かな？」「小ちな子にはこれがぴったりかしら！」など布を裁ちながら使っていただける方たちを想像して一人楽しんでいく自分。また「この布ならお花畑でくつろぐ夢が見られるかもしれない」とミシンを踏みながらいい気持ちになっている自分。湯たんぽ・氷枕袋を製作しながらこんなに幸せな気持ちにさせていただいている私たち。ご病気の方たちのお気持ちが少しでも晴れるようにと願いつつ手を動かすたくさんの協力者に感謝して、また一枚出来上がった袋に思いをはせるこのごろです。

6月13日 : 雑巾 50枚・アイカバー3枚

→ 愛知病院

6月22日 : 氷枕袋 50枚・湯たんぽ袋 50枚

→ 市民病院

7月11日 : 雑巾 86枚・背もたれ大1・背もたれ小3

→ 愛知病院

} 以上お届けしました

◆ご案内

※9月・10月の例会は日程が通常と変更になっています。日時にご注意ください。

【9月】

例 会：日 時 9月8日（金）10時～12時 岡崎勤労福祉会館

テーマ 「死を受け入れてどう生きるかⅠ」講師 光ヶ丘高校校長シスター中山

手縫いの会：日 時 9月12日（火）10時～12時 県立愛知病院看護相談室

【10月】

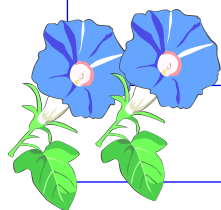
手縫いの会：日 時 10月10日（火）10時～12時 県立愛知病院看護相談室

例 会：日 時 10月14日（土）10時～12時 岡崎市民病院

テーマ 「ガンの痛み」講師 石井正大岡崎市民病院院長

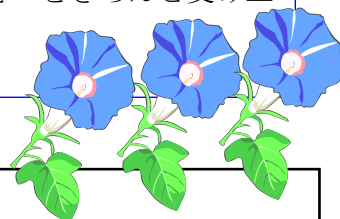
「患者と医者の信頼関係を築くには」のグループの話し合いから

- どんな強い人でも病気の時は気が弱くなっているもの。こちらの質問に一生懸命答えてくださったり、聞いてくださる姿を見せてほしい。その姿を通して患者も生きる意欲を持つことができる。
- 患者は先生に尋ねたいと思ったならなんでも尋ねるべき。また、医者もいつでも応えていただける人であってほしい。愛知病院は1階に相談所という場が設けられているので大変良い。患者は不安、疑問をもったまま家路につかずにすむのでありがたい。
- 昭和60年に乳がんの手術をした。痛みなどの後遺症に悩み、先生に相談しても満足 of いく返事はなく何の処置もないまま7年でその病院は打ち切りにした。1年8ヶ月前にこの病院でまた手術をしたが現在も、痛みで悩まされ解決できないままにいる。
- 妹さんをガンで亡くした。妹さんのご主人がガンであることの告知を拒否されたため、周りの家族は本人に何度聞かれても真実を話せず苦しんだ。だから、元気なときに家族の中で充分“告知”についての話をしておいた方がよい。



「患者と医者の信頼関係を築くには」に参加しての感想

- つくづくお互いの誠実さが求められることだと思います。技術より医師の誠意を求めているのが患者ではないか。そんな点からもケースワーカー制の必要を感じます。
- 主治医の先生は患者の性格を短期間に察しなければならず、その場合もし患者が日頃から近所の医者を主治医に持ち、細にわたり知ってもらえる医者があればその先生の助言を大病院で参考に入れてもらえたら治療に有意義になると思います。
- 自分自身の処し方など、日頃から家族と共に共有し話し合う必要性を以前にも増して感じました。ありがとうございました。
- 「医療の限界を理解しそれによって新たな生きがいや・・・」の先生のお言葉を重く受け止めました。理想的に生き、残された日々を有意義に過ごし立派に受容して死んでゆくことができれば最高です。けれども現実には本人は自暴自棄になったり落ち込んだり、それを見ている家族もつらくて逃げ出したい気持ちになってしまうでしょう。人前では気丈なところを見せている分家では落ち込んでいる、そんな患者の家族同士語り合える場があればと思います。
- 妻の癌に後5年と告知された夫が、再発を繰り返す中で話し合いながら残された日々を大切に生きられた夫婦。最期に食事もせずに寄り添うご家族に弁当を持っていかれた先生はむしろ、患者のこれまでの生き方に突き動かされたのではないのでしょうか。患者と医者との信頼関係を築くことは、この双方に限らず普段の生活の中で互いに相手の思いをきちんと受け止めることだと思います。理屈はわかっているけどそうはいかないのが現実です。そのためのケアをこの会でできないのでしょうか。



伝言板

ー病院でのボランティアでのことー

「車を駐車場から玄関口まで持ってくる間、ちょっと見ていただけませんか」男の方からの声かけでした。そこには50歳ほどの奥様らしい女性が車椅子に座って見ええました。顔を見るととても静かな表情なので「暑くなりましたね」などと話し掛けられたけれど反応がありません。玄関口にいらしたご主人は「待たせたね～、じゃあ行くよ」と話し掛けながらヒョイと持ち上げ助手席に乗せられました。車椅子をたたみながら「穏やかなお顔をなさってますね。ご主人のお人柄でしょうか。」と申しあげたら「ありがとうございます。この人は私の心をすぐキャッチするんですよ。怒れることもあるけれど。アルツハイマーになってもう10年になるんです。これもさだめですよ。今じゃ私の使命だと思ってます」

若いころから徐々に進む奥様の病と共に歩まれた人生を“私の使命”とおっしゃる上品な初老の男性。ホスピスケアとは医療者が患者にすることではなく人間が人間に対する愛のケアだと痛感したひとときでした。